

学校だより 希望の鐘

ひとつのつぼみはいちどしかひらかない



八戸市立 小中野中学校

平成28年11月18日(金)

No.65

文責：校長
工藤聡

「おざなり」な勉強は「なおざり」な自分を育ててしまう

似たような言葉や使い方を迷うような言葉があります。以前、朝日新聞に「『ご苦労様』と『お疲れ様』、上司（ジョウシ：うわ役のこと）にはどちらがふさわしい？」という記事が掲載されていました。以下のようなものでした。

上司には「お疲れ様」を使うべきなのに「ご苦労様」と言う失礼な人を見かける——こんなメールが読者から届きました。私たちが普段よく使うこの2つの言葉について、社会言語学が専門の中央学院大学非常勤講師・倉持益子さんに聞きました。

昭和初期から2010年までのマナー本など200冊を材料に、使われ方の変遷（ヘンセン：長期間に移りかわること）を調べた倉持さんによると、70年代に「ご苦労様は部下（ブカ：上の者の命令・監督を受けて行動する人）へのねぎらい（ネギラウ：ほねおりをなぐさめること）」という記述が現れ、80年代に増加。90年代には「上司にはご苦労様よりも、お疲れ様がふさわしい」となり、00年代には完全に「ご苦労様は目上には失礼だ」と変化してきたそうです。文化庁による05年度の「国語に関する世論調査」でも約7割が「目上にはお疲れ様を使う」と答えています。確かに現代の常識はメールのご意見の通りなのです。一方で倉持さんによると、江戸時代は上下に関係なく「ご苦労」という言葉を使っていたのだそうです。現代の辞書でも「広辞苑」は「他人の苦労を敬っていう語」とするだけで、上下関係には触れていません。

かと思えば、日本語について多くの著書を残した評論家の奥山益朗さんは「ご苦労様もお疲れ様も目上に対しては使いにくい」と「あいさつ語辞典」（70年代）に書いています。

最近では、ある大物芸能人（タモリのことです）が「お疲れ様というのは、元来（ガンライ：はじめから）目上の者が目下に使う言葉。子役が『お疲れ様』と言って回らないようにさせるべきだ」とまで言って話題になりました。

このように、「ご苦労様・お疲れ様」は時代によって使われ方が異なり、また人によって感じ方も違います。他に適当な言い方も見当たりません。新入社員の中には「上司がどう感じるのか不安であいさつするのが怖い」とこぼす人がいるとも聞きます。相手とコミュニケーションを重ねながら選んでいく言葉なのかもしれません。

私も市内の日中学校で教頭だった頃、欠席の電話を受けた際、「ご苦労様」と言って保護者の方にかなりのお叱りをいただいたことがあります。そして「学校は保護者に『ご

苦労様』と言えるほど偉いのか」とまで言われました。ですから、そのことは生徒のみなさんにも伝えたいと思っていました。しかし、機械的に「お疲れ様」と言っても、そこに温かい気持ちがこもっていなければ、それはそれで相手を不快（フカイ：おもしろくないこと）にさせるのかもしれない。ねぎらいの言葉として、心から「お疲れ様・ご苦労様」と言っていれば、それは相手に必ず届くはずだとも思えるのです。ですから、私が保護者の方におこられたのは、適当にそう言っておけばいい…

(⇒裏へ続きます)

